

未就園児保護者に対する 発達理解を促す子育て支援の取り組みからの考察 —産科での親子音楽遊びクラスの活動より—

木 野 仁 美*

Consideration of Child-rearing Support for Parents of Infants to Understand Children's Development
—Report from "Class Playing Music for Parent and Child" in Obstetrics—

Hitomi Kino

【キーワード】 子育て支援, 音楽あそび, 発達理解, 「普通」の親子
Child-rearing Support, Class Playing Music for Parent and Child,
Understand Children's Development, Parent and child of "general"

1. はじめに ～変わりゆく社会の構造の中での「子育て」～

「子育て支援」の取り組みは1980年代から予算措置という形からはじまり、その後1994年のエンゼルプラン策定から、保育所には地域の「保育に欠けない」未就園児とその保護者に向けての子育て支援の役割がより積極的に求められ、1999年改訂の保育所保育指針総則では、保育所が地域子育て支援という社会的役割を担う必要があると明記されるようになったという経緯がある（社会福祉法人 日本保育協会, 2009）¹⁾。そして、2014年以降、政府主導で働き方と共に子育て支援について多く言及され、「子ども・子育て支援新制度」として、「量と質の両面から子育てを社会全体で支える」として更なる拡充を図るべく、検討と実行が繰り返されている²⁾。このような背景に対し、メディアの報道で伝えられる「子育て支援」に関する内容は保育施設や保育士の不足など「量」に関わる現状が中心であり、子育て世代が困っているのは「預けられるか・預けられないか」といった問題だけのように取り上げられている印象を持たざるを得ない。また、「子育て支援」というと経済的な支援策や、虐待や貧困などにともなう大きな問題に直面した親子への支援に関わる内容についてもメディアでは取り上げられやすい。そして、漠然と子育てが難しい社会であるという印象を受ける内容が多く、当事者である子育て世代の多くが漠然とした不安を抱えつつも、自分の子育てや子育て環境はおそらく一般的には「普通」であり、日々の子育ての「小さな困りごとや悩み」は相談したり支援を受けたりするものではないと認識しているものと思われる。このような状況において、子育てや保育、子育て支援の「質」そのものに社会としてどれだけ関心が寄せられているのだろうか。

本稿では、一般的には「普通」であると認識していると考えられる親子について、その日々の子育て

所属および連絡先
* 大阪千代田短期大学

の「小さな困りごとや悩み」に対しての「子育て支援」の一方略からの考察を試みる。

2. 問題と目的

(1) 大多数の「普通」の子育てにある親子にフォーカスする

「子育て支援」の中で目立って取り上げられるのが、発達障害やその疑いによる育てにくさへの支援や、母親のメンタルヘルスの問題、児童虐待といった大きく「問題」と考えられる内容が中心である。教育・保育・心理学などが築いてきた様々な支援方法が、メディアなどを通じて報じられ理解が深まることには意義があり喜ばしいことであるが、一方で「子育て支援」の現場に参加する親子の大多数は「普通」ととらえられる人々である。では「普通」とはどのような状態かといえば、出産の際の母子のトラブルや、産婦に目立った精神的な問題はなく、新生児にも先天性疾患や障がいがない、さらに家族の関係性にも緊急性を要する問題が見られない場合であると筆者は考えている。「健やか親子 21（第2次）」（厚生労働省、2015）では基盤課題や重点課題として、「切れ目ない妊産婦・乳幼児への保健対策」や「育てにくさを感じる親に寄り添う支援」などが挙げられている³⁾。「普通」の子育てととらえられている人々に対して「切れ目のない」とは言え、乳幼児健診ごとでは半年から1年以上の空白の期間が発生する。

筆者はこれまで産婦人科の子育て支援クラスや保健センター、小学校の心理職として、特に明確な問題を持たない親子から、問題に対し支援を必要としている親子らといった、乳児から児童まで幅広い年代の親子に関わってきた。支援を必要とする親子への支援については、方略や機関は日々充実に向かっており、筆者自身もそれらの知見に習ったり、新たな知見を見出すべく実践を重ねてきた。しかし、個別に支援を必要とする親子は園や学校単位でとらえた時そう多い人数ではなく、「普通」の子育てをしているととらえられてきた親子が大多数を占める。だからと言って「普通」ととらえられてきた親子に本当に何も問題がないとは言いきれないからこそ、「育児不安」という言葉で古くから研究が多く存在するのである。牧野（1982）によれば育児不安とは「子どもの現状や将来あるいは育児のやり方や結果に対する漠然とした恐れを含む情緒の状態」とされており、育児不安の状態に陥りやすい養育者の傾向や、そのサポートについてもこれまで多くの研究がおこなわれている。中山ら（2014）の研究では「子育て不安感・負担感は子どもに対して感情的に叱るなどの行為と関連し、それに対して保育相談支援は、母親の育児不安や育児負担を軽減するなど、育児感情にプラスの影響を及ぼすことが示唆される」と述べている。渡辺ら（2017）は、「知識をたくさん詰め込むようなことは必要ないが、心理学的視点を入れた発達段階ごとの重要な知識を持つことで、不安やストレスを低くするという緩和の効果が期待できる」と述べている。

筆者の活動で出会った適切な養育状態にある親子も、2〜3歳の自我の芽生えを迎えるころなどは、子どもを理解したいがしきれないという場面に直面した親から、「小さな困りごとや悩み」を訴えられることはしばしばで、この時期の発達の情報を少し提供するだけで、子どもの行動理解への一助となり目の前の問題を打開していく姿が多く見られた。育児の辛さを共感するだけでなく、子どもの行動を目の前にしながら伝える心理学などの情報は親をエンパワメントする可能性が高い。筆者は活動を通し、

軽微な問題であれば知識によって親自身が自ら解決に向かう力を得いくことは可能であると考えてきた。

(2) 活動を報告し検討する目的

子育て支援は保育現場だけでなく母子保健とのかかわりも深く、また福祉の側面も持ち、保育者、看護師、保健師、心理士などの専門職のほかに、ボランティアの力にも支えられて成り立っている。浦山(2017)の子育て支援で取り組まれる活動内容についての文献研究⁴⁾では、5つのカテゴリーが挙げられ、そのうちの【子育て相談役ボランティアの育成】が適切な養育態度に関わる支援、【育児・教育トレーニングプログラムの提供】や【行政事業等での相談や家庭訪問による心理および実務的なサポート】は不適切からグレーゾーンでの養育態度が見られる場合の支援と分類している。前者はボランティア、後者は専門家のかかわりである。子育て支援の活動は、階層的で問題の見られないところはボランティアが中心に支え、問題の大きいところは専門家の領域ということである。しかし、筆者は地域の産婦人科の産後フォローのサービスの一つとして「小さな困りごとや悩み」があるくらいの「普通」の子育てをする親子対象の「音楽あそび」を通して、音楽療法士、臨床発達心理士、保育士などの専門性の視点を持って単に知識だけを伝えるのではなく、具体的に遊び方や、遊びの内容を子どもの年齢、心身の発達段階に即して提案したり、親が困り感を感じる子どもの行動について発達の観点から解説しかかわり方などの提案を通して、その場を共有する親同士が子育ての悦びや悩みを自然に出し合い学び合う場の提供を行ってきた。また、幼児期の発達の見通しや、幼児期の行動や遊びの本質、意義について、幼児教育や保育が目指している学び(=遊び)の発達の観点をふまえてきた。同様の専門的視点を持つ継続した活動は独自のである。ただ、これまで活動を分析的な視点で振り返ることができていない。養育態度が適切で「普通」の子育てをする親に対して、公的な機関だけでなく、民間の地域に密着した出産や予防接種などで連続してつながる医療機関を拠点にして専門的視点での知識や支援を行う活動を設定することは、問題の早期発見や問題の予防の観点において、切れ目なく親子とかかわる仕組みでの社会資源となると考えられることから、本稿においては、筆者の活動の報告とともに、その活動内での助言の視点について考察する。

3. 活動の概要

(1) 活動の拠点の概要

A市B産婦人科小児科にて活動を行った。この医療機関では、フリースタイル出産や母乳育児支援などによって「豊かな母子関係・親子関係作り」に取り組んでおり、筆者が行った「親子音楽あそび」のクラス以外に、離乳食クラスやマタニティヨガクラス、アフター(産後)ヨガクラスなど多彩な教室を用意し、この医療機関での妊産婦を参加対象者としている。

(2) 「親子音楽あそび」クラスの目的

音楽あそびの活動を設定する理由は、音楽療法的視点において Gfeller (1999) は子どもにとっての音楽活動とは、同じ音楽を使用していてもそれは発達のレベルに合わせた設計になり、それはつまり自在な療法的・教育的なツールであると述べている⁵⁾。また、Thaut (2005) は音楽によって人間の脳は複雑な知覚的、認知的、情緒的働きをするだけでなく、感覚的事象に基づいた時間的に順序だった、ま

た統合された知覚と作用の過程を生み出すと述べている⁶⁾。音楽のもつ、生理学、心理学、脳科学や教育的側面などに注目し、音楽活動という娯楽の要素を含んだ活動で、対象者、特に親の好みや生き立ち、文化的背景と考慮しながら、「フレキシブルにデザインすることが可能で、強制的な印象を対象者に感じさせることなく取り組める内容」(茂野ら, 2007)であることから、下記を目的として行った。

- ①遊び方や、遊びの内容を子どもの年齢、心身の発達段階に即して具体的に提案し、共に経験をすることを通して親同士が子育ての悦びや悩みを自然に出し合い学び合う場を提供する
- ②身体的生理的欲求へのお世話が中心の乳児期以降の幼児の自律に向けた子育ての情報を提供する
- ③幼児期の子どもの発達を見通し、遊びの本質や意義を知る場を提供する

(3) 対象者・活動の頻度・対象者の参加頻度・活動期間

原則としてこの医療機関での出産の親子(父母と子ども)が対象であるが、小児科受診者の希望者も参加可能で、クラス開催前日までの予約制で複数回の参加を可能とした。対象の月齢、年齢については主に歩行の運動発達を基準に、①6ヶ月から1歳(歩行ができる前まで)クラス、②1歳(歩行ができるようになったら)～幼稚園・保育所への就園までの2クラスで、①のクラスは第2, 4水曜日の月2回、②のクラスが第1, 3水曜日の月2回の開催であった。時間はいずれも音楽遊び10:00～11:00、自由遊び11:00～12:00で後半の自由遊びについては随時退出可としていた。

対象者は6ヶ月の乳児期からの参加が大半を占め、ひとりの子どもあたり幼稚園、保育所への就園までの平均2.3年間に平均28回の参加であった。最長で4歳4か月までの参加者や第一子から第四子までの約6年間にわたる参加者もあった⁷⁾。

活動期間は2005年4月から2018年3月までであった。

(4) 活動内容

活動前半の「音楽あそび」の内容と目的について表1に、1回あたりのプログラム例を表2にあげる。ファシリテーターによるキーボードやギターでの弾き歌いに加え、一部に加賀谷式音楽療法(現 ミュージック・ケア)のCD音源による音楽と指定された動きに沿って行った。後半の自由遊びについては、おもちゃを用意し乳幼児は自由に遊び、親はフリートークを行う。フリートークでは、前回の参加時からの子どもの発達や、しつけ面での悩みや困りごと、兄弟関係、幼稚園や保育園の園選びについてなどが語られた。

表1 「音楽あそび」の内容と目的

活動名	内容	目的
こんにちはの歌	挨拶の歌。ひとりひとりの名前を歌にのせて、歌で挨拶をする。	挨拶の言葉と他者の名前に気付く。順番を待つ。相手の行動や返事を見聞きする。
体操「パレード」 作詞：新沢としひこ 作曲：中川ひろたか	カラフルなリトミックスカーフを使用し、上下左右に振ったり、歩行のできる幼児は足踏みをしたりする。また、小さく丸めて手の中に隠したり、出したりする。乳児はスカーフを追視する。	粗大運動での体操。手足を同時に動かす、物を操作する動きでの、手足の協調運動への働きかけと、小さくスカーフを丸めることで、手指の微細運動へ働きかける。
ジャンジャン (加賀谷式音楽療法曲)	手拍子、手を横に振る、かいぐり、きらきらの動作を組み合わせた動きを繰り返す。後半では、曲調に合わせて大きく伸びあがったり、小さくかがんだりする。	簡単な同じ動作を繰り返し行うことで、子どもが「できるようになる」プロセスを親が実感する。また月齢による変遷を親が理解できるように解説をする。
ギリギリ (加賀谷式音楽療法曲)	ジャンジャンと同様	ジャンジャンと同様

元気に元気に ゆっくりゆっくり (加賀谷式音楽療法曲)	寝かせた子どもの脚を持ち上げ、音楽のリズムに合わせて歩くように動かしたり、ゆすったり、脚を開閉させたりする。主に乳児のクラスで行う。	歩行前の乳児に脚部を意識させ、ボディイメージに働きかける。 脚を開閉させる際に、いないいないばあの動きをし、アイコンタクトによるやり取りを楽しむ。
手をつなぎましょう (加賀谷式音楽療法曲)	親子で手をつなぎ小さな輪を作る ところから、曲のリピートごとに 近くの人と人数を増やし、最終的 には全員で輪になって踊る。	主に就園を控えた子どもが多い時に行う。 他者と手をつなぎ広がっていくというルールを伴った遊びを安心できる親と一緒に体験する。
楽器をならしましょう 作詞・作曲：茂野仁美	ハンドドラム、ウッドブロック、 シェーカー、鈴、タンバリンなど の小楽器を使って、自由にリズム を打つ。GO-STOP や速度の変化 を伴う。楽器は間奏ごとに時計回 りで交代。	様々な楽器を体験する。 自由な表現を受け入れられることを体験する。 GO-STOP で周囲やファシリテーターの動きにも 注目する。 他者と協調して行動することを体験する。
さんぽ 作詞：中川李枝子 作曲・編曲：久石譲	大人（親）がプレイバルーンを持 ち、子どもがその下をくぐってハ イハイをしたり歩いたりする。	頭すれすれの高さや、腕を伸ばし背伸びをしてと どく高さ、ハイハイしなければ通れない高さなど 様々な高さになるバルーンの下を潜り抜けること で、身体の使い方やボディイメージを身につける。
新聞紙やぶり	1 曲目では音楽のリズムに合わせて 新聞紙を破ったり叩いて音を出 して遊ぶ。2 曲目ではみんなで協 力して、破いた新聞紙をポリ袋に 回収し、後始末をする。	指先の微細運動を使った遊びを経験する。 破る、叩くことで出る音を体験する。また、際限 なく紙を破るのでは音楽で終わりを明確にし、後 始末の次の行動に移行できるようにする。
手遊び歌 例）・あたまかたひざボン ・いとまき ・パンダうさぎコアラ ・ぎったん ばっこん	幼児番組などで親子が目にしたこ とのある短い手遊び歌を行う。	指先の微細運動や、手足の粗大運動を経験する。 身体部位の言葉と部位のマッチングと、空間認知 を伴うボディイメージを養う。
さようならの歌	挨拶の歌。活動の終了を告げる。	他者と挨拶を交わすことと、終了を知る。

表 2 「音楽あそび」1 回あたりのプログラム例

1. こんにちはの歌	5. 楽器をならしましょう
2. 体操「パレード」	6. 手遊び歌「あたまかたひざボン」「ぎったん ばっこん」
3. ジャンジャン	7. クールダウン
4. ギリギリ	8. さようならの歌

4. 考 察

(1) 「できなくて当たり前」からの発達への視点

初めて参加する親の多くは第一子を連れての参加で、緊張した様子での参加が多かった。6 ヶ月の乳児に「音楽あそび」ができるのかという不安もあったと考えられる。筆者は、初回の参加者には必ず「今できないのは当然であり、まずはお母さんが楽しんで参加する姿を見せてあげてほしい。赤ちゃんは安全であるか、楽しいかということをお母さんの行動や表情を通して理解していく。他者との関係性の基礎となり、幼児期に集団で楽しんで活動に参加できるには、まずお母さん（身近で親密な養育者）が楽しいこと安全であることを見せてあげることが、第一歩となる」ことを伝えてきた。ボウルビィのアタッチメント理論で乳児は、生後 8 週から 12 週以降に人を弁別し身近で親密な養育者（主に母親であることが一般的で大多数）に対しての親密な行動が顕著になるとしており、6 ヶ月以降となるとさらに人を区別して、例えば外出していく人を追う、帰宅した人を迎える、探索行動のために人を利用するなどの愛着行動が身近で親密な特定の人に向けられていき、これは 2 歳頃まで続くとしている。誰にでもというのではなく、「親密な特定の人」というのがこの時期の特徴で、この期間のうち 8 か月ごろには「人見知り」が強くなる乳児は多いことは一般的にもよく知られていることであり、母子手帳の「保

護者の記録【9～10ヶ月頃】」には「後追いをしますか」という項目もある。そして、3歳頃には身近で親密な養育者の姿が見えなくても心の中に思い浮かべイメージを持つことができるようになり、親から離れて活動できるようになるとしており、これはちょうど多くの子どもたちが幼稚園や保育所などの集団生活に入っていく年齢に該当する。「音楽あそび」に参加する月齢、年齢の親子はこのうちの身近で親密な養育者との関係の中で愛着行動を深め、親密な養育者以外の人への「人見知り」を経験していく時期に該当する。親たちの多くは、子育ての仲間や子どもの遊び友だちづくりのために何らかの親子の集まりに参加したい、もしくは参加しなければ近所では子育て仲間や子どもの遊び友だちとは出会えないという環境から、子育て支援を標榜する場へと出かけていくが、その中でせっかく声をかけてくれた人に対して子どもが泣き出してしまふことや、遊びに誘われても取り組まないことが困るということを経験していた。また、参加し始めたころは誰にでも愛想よく笑顔を振りまいていた乳児が、あるころから笑顔で接してくれる人に対してもそれまでのようには笑顔を見せなくなったことに、「人見知り」という言葉を知りつつもその実際の様子に戸惑いを感じていることも語られていた。乳児の愛着形成の一般的な発達過程や、親を参照にして行動に結び付けていくという特徴を、目の前の子どもの行動をみながら専門家によって伝えられることで、「音楽あそび」ができない、興味がないのではなく、「できるための準備」の段階であることを受け止めていけるようになるものと考えられる。

また、運動発達や認知発達、言語発達と活動内容との結びつきについても同様である。例えば鈴を握って音楽に合わせてリズムを打つ場合、まず、運動発達において反射ではなく自発的に物を握ることの始まりは5か月ごろのリーチングからであるが、視覚と運動の連携に腕の筋肉や指先の微細運動の発達がそろわなければできないことである。新版 K 式発達検査 2001（新版 K 式発達検査研究会，2008）においても物をつかむ課題としてはガラガラと積み木が主にあげられるが、ガラガラを自発的につかむのは4～5か月で、落とした積み木を拾うのは5～6ヶ月であり⁸⁾、安定して楽器などのある程度の重さや大きさである物を持つことができるのは6か月以降ということになる。さらに「音楽あそび」の場面では、親やファシリテーターから示されるリズムを伴った動作やリズムを表すオノマトペの声掛けをとおした対人関係も生じている。言語発達の的には前言語的コミュニケーションの時期で、二項関係の時期であるので物へ注意が向くか、人に注意が向くかのどちらかである。この段階の様子から、しばらくすると8～10か月ごろになると、鈴を鳴らしながら親やファシリテーターの反応を気にするようになり行為の共同化や、持っている楽器を交換しようとするなどの三項関係がみられるようになる。場合によって、リズムを打ち鳴らすことよりも、相手のもっている物と交換することに夢中になったり、物同士を当てて乾杯のような動作を繰り返して楽しんだり、本来の音楽あそびからは外れた行動もみられるようになる。このような場合、親はたいてい音楽あそびの内容に沿うよう行動させようとしがちで困った様子を見せるが、今、目の前で起こっていることと、子どもの発達段階と行動意図の解説を行うことで、その後、子どもの行動から意図を読み取ろうとし、「しない」「できない」場面においても落ち着いて対応している姿が多くなっていった。

しかし、親の受け止め方や対応の変化については、個々の事例に基づいているため、客観的な指標での検討はできておらず、それらの検討方法については今後の課題である。

（２）同じ活動の繰り返しから「できるよ！」の発達をみること

「音楽あそび」では毎回必ず同じ内容で、季節の歌や不定期に組み込まれる内容以外については、同じ順番で行っていた。子どもは１歳４ヶ月頃の歩行が安定するころになると、活動の流れを予測することができるようになり、次の楽器を指さして伝えたり、自ら取り出したりすることもできるようになった。また、動作についても何度も繰り返すことで、２歳後半になると音楽の前奏だけで「知っている」「できる」という自信に満ちた笑顔で取り組み始める。音楽に動作を伴っていることが手掛かりとなり、内容を想起しやすくなるためだろう。メタ認知は幼児期後半から発達の兆しが見え始めるものであるが、音楽の刺激によって、幼児期前半の子どもでも、動きやリズムとしては不完全ながらも、触ったり動かししたりする身体部位については限りなく正確であり、記憶できているものと考えられる様子がうかがえる。音楽による刺激と幼児期前半の子どもの記憶の想起の関係性について明らかにすることは、非常に興味深い示唆が得られる可能性があるものと考えられ、発展性について検討し取り組んでいきたいところである。また、自信を持てるということは、物事への取り組みに対して積極的な態度を養う上で、非常に大切な経験である。「音楽あそび」という汎用性の高い活動をいつ参加しても基本的な流れは同じで、それを繰り返し行えることは、子どもが自信をもって活動できる環境を整えることへ貢献できるといえるだろう。

また、同じ動作を行っているため、動きがスムーズになっていく様子を通し、親が子どもの発達を実感しやすいことも考えられる。かいぐりの動きや、「あたまかたひざポン」などは上下前後の空間把握を伴う動きである。大人であれば簡単に回せるかいぐりの動きでも、幼児期の前半のうち２歳前半までは左右の手を交差させてまわすことは難しいが、３歳頃になればスムーズな動きに変化していく。また、身体部位の言葉と部位に触れてのマッチングと共に、ただ部位に触れるだけでなく、ひじやひざの屈曲が滑らかになっていく様子など、未熟な動きが洗練されていく様子は、親にとって誇らしいものである。一つ一つの動きを継続して繰り返される同じ曲目を使った活動から見ていくことは親からもとらえやすく、他の子育て支援の場に参加した際など、別の手遊び歌で同じ動きが含まれていたときの子どもの様子と照らし合わせやすく、子どもがどんなことであれば参加し楽しめる発達段階なのかということが判断しやすかったという感想も聞かれた。子どもの発達段階や発達の個性についての理解を促していたものと考えられる。

（３）フリートークで語られる「小さな困りごとや悩み」

フリートークの時間で語られる内容は、しつけ面や言葉の発達、園選びなど多岐にわたる内容であった。中には医療的な内容や栄養面での困りごとや悩みも見られたが、その際は小児科での相談や、医療機関で行っている離乳食クラスへの参加や、保健センターでの健診の際に相談するようになどと促し、医療機関内で対応できる内容であれば、医師や看護師、助産師らとの連携も行った。

しつけ面で多かった内容が、トイレトレーニングとおもちゃの貸し借り、片付けである。トイレトレーニングを始める時期は、多くは２歳前後でちょうど自我の芽生えの時期とも重なり、トイレに誘っても「ナイ！」と言って行かず、その直後におもらしをする、オムツを穿きたがり布のパンツを嫌がるなど、子どもなりの行動意図が見え隠れする様子がうかがえるが、親にしてみれば反抗でしかないことである。インターネットで調べたやり方をいくつか試したがうまくいかない、通信教材のトイレトレーニングの

教材を使ってみたもののうまくいかなかったというケースもあり、親自身で情報を集めようと努力は行っている。しかし、やり方には注目しているが、自我が芽生え始めた子どもの行動意図への視点が欠けているのである。教材やインターネットではわからない個別の子どもの様子を踏まえ、トイレに行つてほしいタイミングの前後の子どもの様子を聴きとり、考えられる子どもの行動意図について想像を巡らせ読み解いていけるように、発達的な観点からの助言を行った。もともと自分で情報収集をできるだけ力を持つ親たちであるので、反抗的に見える行動には「自分でしたい、決めたい」という子どもの思いがあることを知れば、読み解き子どもの行動意図に寄り添いつつもしつけに取り組んでいく力を発揮することができる可能性を持っており、時間のかかるしつけにも丁寧に関わっていくことができたようである。また、対人面を伴うおもちゃの貸し借りについても同様で、一見、言葉で表現できはじめてるように見えて、思いをまだ出せるだけの言葉は持っていないことと、他者の視点に立てるのは「心の理論」が達成されることが必要であることについても伝え、大人の手助けが必要なことへの理解を促した。

親全体に言えることは、それぞれが他の親から自分たち親子がどう見られるかということを非常に気にかけている様子がうかがえた。だからこそ、トイレトレーニングも子どものためというよりは、早くできたほうがよく見えるから頑張りたい、おもちゃの取り合いになったときに、先に譲れる子であってほしいという思いも見え隠れする。大きな問題はなくとも、他者への気遣いが他者との比較に発展してしまい、親同士での相談をしにくくし、「小さな困りごとや悩み」となっているのではないかと考えられる。この点について、「他者への気遣い」と「他者との比較」という視点から、専門家が親の思いを語ることをコーディネートし学び合いの場を作る役割について検討を深めていきたいと考えている。

5. おわりに

「子育て支援」の活動は、階層的でより問題の大きいところは専門家、問題の見られないところはボランティアが中心に支えているといえる前述したが、問題の見られない「普通」の子育てをする親であっても日々の子育ての中で「小さな困りごとや悩み」は抱えているものである。そのような親子らは、インターネットや育児雑誌、乳児向け通信教育教材などから様々な情報を得ている姿が見受けられた。これらの情報の内容は、発達について正しいことが書かれているものもあるが双方向ではない。双方向の対面の中で発達心理学に基づく視点からの内容で、子どもと活動する場を提供し、目の前で繰り広げられる子どもの行動を親と共に読み取り、子どもの発達していく姿への理解を促していくことは、親をエンパワメントする可能性が高いことが示唆される。断定的に述べることはできないが、親たちは子育ての仲間や子どもの遊び友だちづくりのために何らかの親子の集まりに参加したい、もしくは参加しなければ近所では子育て仲間や子どもの遊び友だちとは出会えない環境から、子育て支援を標榜する場へと出かけていきつつも、他者の目を気遣い、他者との比較をするなか、「小さな困りごとや悩み」の問題だけでなく、子育てそのものにも自信を持つ暇もなく子育てをしていることが考えられる。

現代の社会構造の変化は「子育て支援」が充実に向かっているといえども、ひとりひとりの親子にとって本当に心から安心していられるものではなく、むしろ心理的に子育てのしやすい環境だといえるだろうか。また支援をする側も多様性が尊重される社会だからこそ、その支援も多様性を帯び、簡単ではな

いのが実情ではないだろうか。そして、専門性を持った人材は問題の大きなところに必要とされ、問題のないところでは専門性の緩やかもしくは専門性を持たないボランティアが担うこととなり、問題のないところでの対応そのものにも、多様性が広がっているのではないだろうか。

本稿では、これまで取り組んできた活動について振り返り、専門的視点から行った助言の内容について報告したが、問題がないからこそ親が自信をもって子育てに取り組んでいけるにはどのような専門的内容を織り込めばよいのかということをまとめるところには至っていない。今後は考察で述べた一つ一つの課題について、客観的な数値化や指標化を目指し取り組み、問題を持たないとされる「普通」の子育てをする親たちへの「子育て支援」の一方略を見出していくことを目指していくことが課題である。

<注>

- 1) 社会福祉法人 日本保育協会 (2009)『みんなで元気に子育て支援—地域における子育て支援に関する調査研究報告書—』(http://www.nippo.or.jp/research/pdfs/2009_04/2009_04.pdf 2018.10.18 取得) によると、「子育て支援」の取り組みは1987年の「保育所機能強化費」の予算措置からはじまり、その後1994年のエンゼルプラン策定から、保育所には地域の「保育に欠けない」未就園児とその保護者に向けての子育て支援の役割がより積極的に求められ、1999年改訂の保育所保育指針総則では、保育所が地域子育て支援という社会的役割を担う必要があると明記されるようになったという経緯がある。
- 2) 内閣府・文部科学省・厚生労働省 (2015)『子ども・子育て支援新制度 なるほど BOOK 平成28年4月改訂版』
すべての女性が輝く社会づくり本部決定 (2014)『すべての女性が輝く政策パッケージ』(<https://www.kantei.go.jp/jp/topics/2015/josei/20150730siryou7.pdf> 2018.10.18 取得)
首相官邸ホームページ (2015)『一億総活躍社会の実現』(<https://www.kantei.go.jp/jp/headline/ichiokusokatsuyaku/index.html#m012> 2018.10.18 取得)
- 3) 厚生労働省 (2015)『健やか親子21 (第2次) ホームページ』(<http://sukoyaka21.jp/>)
- 4) 浦山 (2017) は文献研究において、子育て支援で取り組まれる活動内容は、【育児・教育トレーニングプログラムの提供】【母親たちが集まる場所の提供と活動】【行政事業等での相談や家庭訪問による心理および実務的なサポート】【電話やインターネットを利用した相談支援】【子育て相談役のボランティアの育成】の5つのカテゴリーに分けられるとしている。浦山昌美 (2017)「子育て支援に関する文献検討と母親への支援の課題」『山口県立大学学術情報 第10号』39-45。
- 5) Gfeller, K. E. (1999)「Music: A Human phenomenon and Therapeutic Tool. 35-59」W. B. Davis, K. E. Gfeller, & M. H. Thaut『An introduction to music therapy: Theory and Practice. Second Edition.』Boston: McGraw-Hill. より、筆者による要約。
- 6) Thaut, M. H. (2005)『Rhythm, Music, and the Brain, Scientific Foundations and Clinical Applications.』Taylor & Francis Group, LLC. より、筆者による要約。
- 7) 2005年4月の活動開始から2018年3月の終了までの12年間の参加者名簿より平均値をとった。1回のみの参加者がいる一方、複数年にわたって参加した者や、対象年齢内の兄弟での参加もあった。
- 8) 新版K式発達検査法2001の検査項目の課題通過の年齢級を参考とした。
新版K式発達検査研究会 (2008)『新版K式発達検査法2001年版標準化資料と実施法』ナカニシヤ出版。

<引用文献>

- 牧野カツコ（1982）「乳幼児をもつ母親の生活と〈育児不安〉」『家庭教育研究所紀要第3号』 34-56.
- 中山智哉・渡邊望・春高裕美・木山徹哉（2014）「母親の育児感情に影響を及ぼす要因の探索的検討—母親の育児方法・育児への省察および保育相談支援との関連—」『九州女子大学紀要 第50巻2号』15-29.
- 茂野仁美・菅千索（2007）「幼児教育における音楽活動からの「気になる」子どもの行動アセスメント—音楽療法的視点からのアセスメントの試み—」『和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要』No.17, 39-48.
- 渡辺弥生・大川真知子（2017）「子どもの発達に関する知識が育児ストレスに及ぼす影響」『法政大学文学部紀要 第74号』81-93.